

人小西來山は曾て十萬堂から正東に當る一心寺の雨景を詠じて「時雨るゝや時雨るゝ中の一心寺」と云つてゐるから、十萬堂の處から一心寺は一眸の内に入つたのであらうが、今は人家が立ち塞がつて左やうな景色は最早想像だもなし得ない、尤も明治三十年頃の寫眞を見るときは尙來山時代の情景を存し、人をして當時の詩情を想起せしむるに足るものがある、兎に角最近の大發展には實に何人も驚嘆せざるを得まい。

### 第三 地理氣象

#### (一) 概 説

大阪市正南一帯の丘陵地より西方、紀州街道に沿へる低窪部は、地勢平坦にして地味肥沃である。當町は實に此の大阪市から直南の低窪部に在つて北は大阪市、南は玉出町、西は十三間堀川に終り、東方は天王寺村に接して居る。

#### (二) 位 置

方位

東 東成郡天王寺村

西 西成郡津守村

南 西成郡玉出町

北 大阪市南區

(三) 町役場の所在地

大阪府西成郡今宮町梅南通一丁目

(四) 境界

本町は攝津國大阪市の真南に位し、形四角形に似て、其底部にあたる南部は高野線を距て、玉出町に接し、西部は十三間堀川に面し、上部は關西線を距て、大阪市に對し、東部は飛田通りにより天王寺村と境してゐる。而も其境界にこれと指摘すべき物なく、只南北に鐵道があるので知られるのみである。本町の位置は大阪市の隣接せるため大阪市より受くる經濟的其他の影響も亦甚だ大なるは言ふ迄もない。

(五) 廣袤及び面積

本町の廣袤は東西十六町五十間、南北十九町十五間、其の面積〇、一九一四里、之を他の町村に比すれば大なりと言ひ難く、天王寺村城東村鶴橋町鷺洲町よりは小にして、中間に位すれども、現状の今宮町勢は遙か天王寺村鶴橋町より一等群を抜いて盛運に向つて居る。蓋し土地面

積の利用によるもので、大阪といふ大都市に隣接せる集約的商業工業の施設等に關係するものである。即ち當町の人口が十萬に餘り小市以上に及ぶ繁盛を示せるは全く右の二つの關係によるものである。

(六) 地勢

本町の地勢は全く平坦であるが、東部に至るに従つて漸次隆起して東成郡との境界附近より一帯の低い丘陵性の臺地に連つてゐる。此の臺地は洪積層の地であつて、標高約十米以上に及んでゐる。古代の沿革によると本町の如きは一帯の低窪地であつて、曾ては蒼波の奔跳してゐた所であることは疑ふ餘地がない。従つて當時に於ては丘陵の尖端である難波ヶ崎の如きは、有名な地であつた。爾來地殼の變動は瞬時もやまず遂に現今の低平なる沖積地を作つたものである。

(七) 氣象

(1) 氣溫

最高 三五度九 (大正十三年七月)

最低 氷點下一度四 (大正十四年二月二十四日)

累年平均

每日最高平均一七度八

每日最低平均一〇度

每日較差平均七度八

最高極 三七度六 (明治四十二年八月四日)

最低極(氷點下)七度一 (明治二十四年一月廿五日)

(2) 降水量

總量 一二九三耗九 (大正十一年)

累年總量平均 一三七六耗六

最大量 一七四耗七 (明治二十九年八月三十日)

(3) 風 (大正十三年)

平均 二米六五

最大 一八米

平均 方向北三度西

(4) 天氣日數

快晴 四〇

晴 一五〇

曇 六八

雨 三二

風 七六

初雷雨 (七月二十八日)

(5) 霜雪季節

初霜 平均 大正十三年十一月十二日

終霜 平均 大正十三年四月八日

初雪 平均 大正十四年十二月二十二日

終雪 平均 大正十三年三月廿五日

(6) 其の他 (大正十一年)

水蒸氣の張力 平均一耗〇九

濕度(%) 平均七二耗三

雲量(%)

平均 六耗

日照時(晝間時數に對する%)

五六

(八) 地 質

大阪四近の地貌は、平野及、丘陵を主とし、山地は全くない。従つて地質は Cainozoic era の洪積層及び沖積層よりなる大阪市上町より連亘して居る臺地は礫砂粘土から出來てゐる。從來第三紀層と見做されたものであるが、古期洪積世には日本全體を通じて多雨期であつて、當時山地に近い低地には厚い礫層を作つたといふ見地から見れば、正しく古期洪積層に屬するものである。此の臺地より西に向つて傾斜しつゝ、接續して居るのは Alluvial epoch の生成物であつて、沖積層と埋立地とよりなつて居る。本町の殆ど全部は沖積層よりなつてゐるが、西方の極めて小部分には天然沈積作用と、人力とによる所謂近世埋立地に屬するものが存してゐる様である。埋立地にも二種あつて近世埋立地は延寶七年以後の埋立地であつて、西方の一部は之に屬してゐる。次に最近埋立地は築港方面のものであつて、本町には之を認めない。

要するに本町の東は古期洪積層の臺地に接續し、西は近世埋立地に連接し、此の中間に挟まれた洪積層よりなる低平地であつて、現今の市街は此の上に建設發展せるものである。

第四 人口及其動態

明治三十年に舊關西鐵道以北の地を大阪市に編入せられた當時の今宮村は、僅に百三十四戸の一寒村であつた。星移り物替はり約二十八年の歳月を経過した今日となつては、人家櫛比して、人口七萬五千の上に出た。これ我國に於ては特別の理由を有してゐる神戸、横濱、横須賀、吳、佐世保の如きものを除いては、他に多く見ない所で如何に大都市の接續町村が異常の膨脹發達を爲すものであるかを物語る代表的のものであらう。今舊大阪市の四區と、人口の密度を比較すれば左の通りである。

區別	人口密度	面積	人口	一方里の人口
西區	四區は大正十二年調 今宮町は同十三年調	一方里八七	四三五、六〇〇	二三二、九四一
南區		〇方里六四	四四九、二〇〇	七〇一、八七五
東區		〇方里四九	二〇二、七〇〇	四一三、六七三
北區		〇方里七九	三〇四、一〇〇	三八四、九三七
計		三方里七九	一、三九一、六〇〇	平均三六七、一七六

今宮町

○方里一九

七五、四〇〇

三九〇、三九六

四六

右の表で見れば人口の密度に於て東區とは聊か遜色あるも、北區の上に出て居り、南區の密度には尙遙かに及ばないが、然し當町は未だ三十萬坪以上の畑地や空地を有してゐるから、東區の密度以上になる事は、決して長い時日を要しない事であらう。

次に最近十二年間人口増加の趨勢を觀察すると左表の結果を得た。

最近十ヶ年人口増加の趨勢

年次	戸口區分		戸數
	男	女	
大正十三年	三九、五七二	三五、八三三	七五、四〇五
大正十二年	三九、一八八	三四、一一九	七三、二四七
大正十一年	三四、一三八	三〇、七三一	六四、八五九
大正十年	二七、七八一	二五、五二二	五三、二九二
大正九年	二五、〇二七	二三、九七五	四九、〇〇二
大正八年	一六、五〇九	一五、四一〇	三一、九一九
大正七年	一四、三〇一	一二、七一五	二七、〇一七
大正六年	一二、四八三	一二、〇四六	二四、五二九

大正五年	一一、四四五	一一、一三九	二三、五八四	五、六四六
大正四年	九、五五九	九、二五八	一八、八一七	四、八四〇
大正三年	八、〇三八	七、六三二	一五、六七〇	四、〇〇九
大正二年	五、九八七	五、二七一	一一、二五八	三、六二五

備考 大正十三年度は十二月末日現在

右表によれば大正二年に一萬一千餘人なりしものが、同五年に二萬三千餘と云ふ倍數以上となり、同九年には又其二倍以上の四萬九千となつてゐる。又其毎年度の増加の割合から見れば何んと云つても財界好況の絶頂であつた大正八年より九年に至る一ヶ年の増加が一萬七千餘人の記録を示してゐる、其後同十年より十一年十二年の間は各年一萬人内外の増加率である、是れは寧ろ財界不況が直接間接の原因をしてゐるとも推測せられる。併し増加する一方で、少しも減少することのない本町の將來は畏るべきである。

次に各町に於ける戸口分賦の狀況を示せば左の通りである。此の表に於て注意すべき事は南海本線以來の人口が二萬三千六人で以西は五萬三千九百九十三人の振合ひである。而して此の以西の分より東西皿池町の千七百三十三人を除く四萬九千六百六十人なるものは、即ち第一第二の耕地整理完成地域である事である。



寄他郡市	一、一三六	八八八	二、〇二四
留他府縣	四〇四	四二一	八二五
共他	一三八	一一	一四九
入他町村	四七三	四一七	八九〇
寄他郡市	八、六三三	八、〇七九	一六、七一二
留他府縣	一五、〇〇六	一二、八〇七	二七、八一三
出生	一、四三二	一、四五〇	二、八八二
死亡	一、〇八七	一、〇七三	二、一六〇
婚姻			四一四
離婚			三八

五〇

### 第五 行政機關

#### 難波造都以來の治政

神武天皇が大宮を大和に營ませられ、茲に即位の大禮を擧げさせられて以來、皇居は屢々移り替つたが、而も大抵は大和の内に在つた。それが仁徳天皇に至つて、此の大坂即ち舊名の難波に都を奠められた、尤もその前の應神天皇の時に難波の北方大隅に大隅の宮を造營せられたが、それは離宮に過ぎなかつた。併し此の難波津は其前から海陸交通の要衝であり外國との交通も相應に行はれたことであるから仁徳天皇が皇居を難波に置かれたことは、天下を知るしめす上に少なからぬ御便宜があつたものと想はれる。仁徳天皇が高津の宮を定め給うてから以來、孝徳天皇の長柄豊碓宮の御造營あり、引續き奈良朝の末に至るまで此の難波に長く都を置かれたのである。

天武天皇の時代には特に攝津職と云ふ官府を設けられた。此の官府は一般國司の職掌は勿論其他大宰府より上下の使官接待し郵便驛遞より船舶の指揮監督に至るまで總てを取扱ふ役所で其の長官を大夫と稱して居た。京には京職があり左京大夫、右京大夫が二つに別れてゐた。攝